

茶の湯文化学会会報 No.38

第38号 / 2003年 8月18日 〒606 京都市左京区下鴨森本町15 TEL. 075-702-9270
発行 茶の湯文化学会 -0805 生産開発科学研究所内 FAX. 075-702-9314
http://www.chanoyu-gakkai.jp e-mail chanoyu@oregano.ocn.ne.jp

石黒況翁と半月庵についての一発見

村上瑛二郎

平成十四年十一月末に、京都古書組合総合目録第十五号が知り合いの古書店から送られてきた。何となく眺めている内に、あれ？と思うものが目に入った。三〇頁に、

売り立て番号二六一〇小松宮親王筆 半月庵幅 絹本墨書 本紙三一・五×四四センチメートル小松宮は明治時代の軍人で日本赤十字社総裁、その関係ゆえ石黒忠憲に書き与えたものと思われる。箱に「小松宮彰仁親王筆 半月庵額字 石黒忠憲敬襲」とあり忠憲の茶人としての雅号である半月庵を書したものの。「彰仁親王」印他、美、箱付。

とある。これは、東都茶会記にある記事のものではないか？

東都茶会記の第一輯上巻の「献立は五目酢葉味は七色唐辛」（丁）の「半月庵」の記事がそれである。要約して言えば、東都茶会記の著者、高橋箒庵はロンドンに留学中、森鷗外と共に訪れて来た忠憲に初めて会い、帰朝後交際を深めたが、石黒は明治十三年頃から茶道を遠州流の茶人赤塚宗輔に学び、明治十六年には「好求録」という著書を著すなど、既に茶人であった。石黒は況翁と号し、また半月庵不円の号を持っていた。

その半月庵不円の号に関する由来は次の通りである。

小松宮彰仁親王は、夫妻で茶が好きであり、自身で茶会用の水を井戸から汲む程の茶人で、石黒忠憲夫婦をしばしば茶に招いた。ある時、忠憲に対し、宮は「余は卿をたびたび茶に招けども、卿は一度も余を招きたる事なし。今度は余が卿の客になるべし」と云い出す。

忠とくは畏まって、有難い仰せではあるが、自分は父祖より勤王の教えを聞き伝え、尊い方の為には身命も抛つ覚悟で、かほど尊い方をお招きするとなれば、他人の住んだ家、人の踏んだ畳でお招きするわけにはいかない、すべて新築しなければならぬから、従って御馳走になるばかりでお招き申し上げないのだと答えた。宮は面白がって「然らば新築して招いてはどうじゃ」と迫る。忠憲はやむを得ず「今より十五日間の猶予を賜れかし、御成りは何日何時に」と、お受けして、御殿を出るとその足で深川の材木屋に走り、即日建築に着手、それから十四日目の夕刻には三畳向切の茶室が出来上がったという。かくて翌日、和歌四天王の慶運の古今切を床に掛け、宮から玉筥の銘を賜った古瀬戸茶人を用いた他は、すべて新しい道具で宮夫妻をもてなした。宮は忠憲の心入れを愛でて、やがて、この茶

室の名は何と云うかと訊ねる。忠恵は「十五日間にて出来上がりたれば半月庵と申す」と答え、更に、今後、自分の雅号は「不円」とするつもりであると告げる。官は興じて、半月庵は面白い、不円は半月に因むのかと問う。忠恵は一笑して、そうではなく、今日使った道具は、すべて一円未満の品なので、それで不円というのだと答えた。官夫妻は大いに喜び、その後、官から「半月庵」の扁額が贈られたという。以上のエピソードは、東都茶会記から引用されて、他の著書などにも登場する。箒庵自身も、その後も「近世数寄屋物語」などに表現は少し違うが、再述している。そのエピソードの裏付けになる資料などはないだろうか。

今まで、書籍は兎も角、自分の目で実物が見られないカタログで、美術品を買った事はない。しかし、乏しい小遣いでも買えない程度の値段でもなく、思い切つて注文を出した所、誰も競争相手がなかったのか、あっさり落ちた（他に発注したものもあつたのだが、こちらは抽選で敗れた）。十二月五日に送られて来た実物を見ると、本体は茶色を基調とした非常に豪華な表装であり、軸は象牙でずっしりとしている。

本紙は、半月庵の三字が右から横に、気品のある隷書で書かれ、「彰仁親王」と「不爭之章」の二つの篆刻の四方印が捺されている。関防印は「和風□□」とあるが、□□が読めない。箱表の墨書は、カタログにある通りである。裏と云う字には、着物を着せるという意味があるから「敬襲」は、敬つて表具を作つたという意味だろう。そして、箱裏には、びっしりと小さな字で、漢字・平仮名・片仮名混じりで、忠恵が箱書をしている。以下がその全文である。

明治十七年三月某日小松宮彰仁親王殿下に
今戸の御邸ニ伺候シ謁ヲ賜フ殿下曰余石黒
ヲ茶ニ招ク事数回未タ一度モ石黒ニ招カレ
タルコトナシ何ソ招カサルカト於此恐懼
答シテ曰石黒ノ 殿下ヲ景仰シ奉ル事他ノ
輩ニ同シカラズ苟モ殿下ノ台臨ヲ仰クニハ
諸禮ニ於テ他ト同シカラサルハ勿論茶室ノ
如キモ之ヲ新築セザルヲ得ズ故ニ心ニ願フ
テ未タ拝願セサルナリト 殿下曰ク然ハ何
ソ茶室ヲ新築シテ招カサルヤト於此殿下ニ
願フテ曰ク然らバ四月二十七日ヲ以テ台臨
ナラセラレン事ヲ請願ス今ヨリ工ヲ起シテ
新築シ以テ奉迎セント殿下笑フテ其請願ヲ
許サル乃チ工ヲ起シ日夜工ヲ急ギ一室ヲ新

築シテ四月廿七日ヲ以テ台臨ヲ仰キタリ當
日殿下其室ノ名ヲ問キ玉フ拝答シテ曰此室
起工十五日ニシテ了リ本日台臨ヲ迎フ因テ
半月庵ト名クト 殿下曰ク善シ□□其額ヲ
書シ與ヘント此書即此ニ賜フ所也

況翁半月庵主識

□の部分は、まだ私には解読出来ない。最初の□は「覽」ではないかと思うのだが、自信がない。後の□□はちよつとわからない。私は、小松宮も石黒忠恵も、その筆跡については詳しくない。しかし、此のようなものに贋物は有るまいと思われるので、これはやはり、東都茶会記の記事の真实性を裏付ける資料であると考えられる。

ともあれ、この箱書の文からは、いくつかの事が読み取れる。高橋箒庵は、この事件が起きたのを何時と書いてはいないが（東都茶会記を一部解説した高原富保著「近世名茶会物語」には、明治二十年頃であろうかと記述がある）、この箱書で明治十七年の事と判る。箒庵が東都茶会記の記事にしたのは、明治四十五年二月十四日以降、三月九日以前であるから、事件後、二十八年後のこととなる。

明治十七年は、正月に兵制改革の為に大山巖陸軍卿らが渡欧し、六月には鹿鳴館で最初

の舞踏会が催され、欧化万能の時であつた。この時期、茶道は非常に衰微していたというのが定説である。しかし、上流階級では、個人的な嗜好もあるかも知れないが、このような風流な茶道の付き合いがなされていた。案外、今、我々が思っている程、茶道は見捨てられていなかったのかも知れない。（未完）

研究会

第一八回研究会を、一月二五日（土）静岡県金谷町のお茶の郷博物館で開催した。当日は中国茶の試飲の場も設けられたほか、范増平氏による中国茶の実演も行われた。講演・研究報告の内容も多彩であつた。その要旨は次の通りである。

文化とは何か

江淵一公

日本語で一般的に使われている「文化」には大別して二つの用法が見られる。一は「教養」に近い意味の使い方、もう一つは「縄文文化」「江戸文化」といった使い方、これは「生活様式」を指し、価値的なニュアンスは持たない。文化人類学という文化には、人々

が「文化」と意識している部分と、必ずしもそう意識していない日々実践している部分とがある。そのことを「氷山」に例え、水面上に現れている部分を「意識された文化」、水面下に隠れている巨大な部分を「意識されていない文化」と呼んでいる。「意識された文化」の部分（学問、芸術、宗教、道徳・法など）が、「教養」と呼ばれているものに近い。

これは個人が、民俗文化と歴史を源とし、意識的に身につける努力を重ねることによって完成度を高める。水面下の大きな部分は一般に「民俗文化」と呼ばれている昔からの暮らしの知恵（自然観・社会観、生活技法等）の集積である。近現代では世界各地の文化、特に欧米の科学技術や芸術の流入が盛んで、その結果、在来文化と外来文化は複雑な関係を創り出しながら、日本の文化全体の質を変えつつある。近年ではまた、「通俗文化」「大衆文化」「消費文化」と呼ばれるものの流入も激しく、外面的には世界共通のファッションやライフスタイルの普及を促進している。このような状況の中で、日本人にとって何が「伝統文化」といえるのか不分明になってきている。「伝統」とは、無意識的に過去と連続する「民俗」と、過去との断絶を認識する

「歴史」との中間的・二重的性格を持つものである。また「伝統」とは現代を生きる個人が精神的修養・身体的修練を通して、ある思想・技法の実行力を身につけた時、その「過去」は「伝統」と呼ばれ、現在に生きる場を与えられる。個人の意識的努力、実践的能力という意味で伝統は創造性を含むものであり、単なる模倣ではない。歴史的に育まれた思想・技法を意識的に学び取つたものとしての「教養」は深い味わいと様式美を持つ完成度の高い「型」に収斂し、日本独特の様式美と思想性を持つ伝統文化となつている。伝統文化は地方から都市へ持ち込まれることによつて洗練され、高められると共に、都市から地方へ還流して、民俗文化に対して潤いや美しさを与える。都市は外来文化・異文化との接点として、人々に自己の文化の特質を意識させ、伝統文化に新しい息吹を与える場でもある。伝統文化活動は単なる過去の模倣ではなく、常にそれを担う人々による「意味の再発見」と「創意工夫」を媒介してのみ継承と保持が可能となる。

東南アジアにおける食茶文化

中村羊一郎

東南アジアに漬物として食べるお茶があることは早くから知られていた。ミャンマーではそれをラペソーと呼び、タイではミアンという。田辺貢『実験茶樹栽培及製造法』（昭和9年、目黒書店）において、レットペット、ラオ、ミエング等の名称と製法が記載されているが、レットペットはラペソーあるいはラペソーに具を混ぜたもの（ラペット）のローマ字的読み方であって、彼の知識が文献によるものであることを示している。しかし、戦後になって、橋本實や松下智、守屋毅などの現地調査によってミアンやラペソーの実態が具体的に明らかになされた。

従来の食べる茶の位置づけは、飲む茶との先後関係に関心が置かれ、食用茶から飲用茶へ、あるいは、飲用茶から食用茶へというように、ともに直線的な推移を想定したものであった。しかし、食用茶の広範な分布、及び飲用茶製造法との技術的な違いから見て、両者は本来全く別なものであって、地域を異にしながらそれぞれ独自に発展した茶利用技術であると考える。この食用茶の分布圏の中心は中国雲南省西南部・ラオス北部・タイ北部・ミャンマー東部の、いわゆる黄金の三角地帯を中心とする標高一千m前後の高地で、現在

の地図では異なる国々に属しているが、実際には国境に関係なく、主として焼き畑を生業として自由に移住を繰り返してきた諸民族の生活圏である。そして、彼等の言葉では茶のことを共通してミアンと呼んでいる（漢字の茗をもって表記されたのはミアンであると考えるのが妥当ではないだろうか）。このことから、カメラリア・シネンシスをミアンと呼ぶ人々はそれを食べ物として生活に取り入れ、チャと呼ぶ人々はそれを飲み物として利用し始めたときとみてよいだろう。では、食用茶が現在のようにミャンマー以外では一部の少数民族によってのみ愛好されるようになってしまった理由は何か。それはこの地域に進出してきた多くの中国人が持ち込んだ中国的な飲茶文化の影響を受けて、元來飲用の習慣が無かった食用茶愛好者が、飲用も始めたために現状では明確な区分けが出来にくくなってしまったのである。食茶文化を飲茶文化と対等の立場に置くことは、文字の上に成り立ってきた中国や日本の茶文化に対して、まさに日常の嗜好品としての庶民の茶文化の存在を際立たせることができ、今後の茶文化研究に新しい視点を提供できるものと考えられる。また、茶のもう一つの利用方法にその浸出液を調理の

素材に使うということがある。布目潮瀨氏は『茶経』に登場する混ぜ物をして飲む茶のことを薬と理解しており、日本では番茶をペースとする茶粥などが該当する。したがって、茶利用を次の三つに分けることによって、総合的な茶文化研究が可能になると考えている①飲む②調理の素材とする③食べる、である。

天心のティーイズム

田中秀隆

岡倉天心は、『茶の本』の中で、teaismとteaceremonyの言葉を使い分けている。また、zennismという言葉も使っている。これは、茶を日本人の生活哲学として主張するためであった。『茶の本』を理解するには、この時代に天心が、外国においてどのように日本の茶と関わりを持っていったかを知ることが始まる。第一章に、The Cup of Humanityを配した天心が、背景に考えていた第三のismがhumanismであることは言うまでもない。天心と茶が絡んだ場面として万国博覧会が存在する。万博を視野に入れることにより浮かんでくる天心のメッセージをとらえてみたい。天心が積極的に万博と関わりを持つよ

うになるのは明治二六年、シカゴ万博の際に展示された「鳳凰殿」の英文解説を担当してからである。この時、日本は初めて喫茶店を開設し、茶の普及宣伝を行った。以後、博覧会のために日本は喫茶店を出している。明治三七年のセントルイス博覧会で、天心は絵画における近代の問題を講演した。そして、その二年後（一九〇六年）に『茶の本』が出版された。万博の茶店はジャポニズムを生み出す魅力的な見せ物として多くの人々が足を運んだ。しかし、このような儀式的な飲用形態はかえって、セイロン紅茶に対するハンディキャップとなった。この頃から急速に普及し始めた紅茶は、アイステイをはじめとする飲ませ方や宣伝方法には欧米人の心を捉えるものがあつた。おそらく天心は、内から見た文化と外から見た文化の違いを痛切に感じたことであろう。日本茶の敗退、日露戦争の勝利という交差する状況の中で、天心は西洋の「オリエンタリズム」に孤独な闘いを挑み、その戦場を茶の文化の領域に定めた。このような背景を考えた上で、本書を読むと別の意味も読み取れるのではないだろうか。この中で、天心は茶主義（ティーイズム）と禅主義を理解させようとしている。第一章から、ティー

イズムとの関連で整理すると、ティーイズムの規定（教義）、ティーイズムの分類、以下、淵源、空間（礼拝）などを述べ、日本人の審美主義を通じて物の深さを知る日本人の心、死生観を述べている。また、茶の流派への言及においては、紅茶に対する意識も感じられる。植民地や人種問題等も念頭にhumanityの訴えを行い、茶の中の哲学をもって、世界に日本をどのように示そうとしたかが伺える。時代背景を考えながら『茶の本』を読む時、そこからはまた新しい面が見えてくる。

台湾の茶芸文化

范 增平

台湾の茶業の始まりには諸説があるが、一八一〇年に福建省武夷山から種子を持ち込み、現在の台北県に植えたのがはじまりと言われる。以後南部へと広がり、茶は、樟脳、砂糖等と共に台湾の重要な輸出品となる。一九七七年、茶愛好家達が喫茶風俗の復活を図ることを提案した。最初「茶道」という名も出されたが、当時の対日的な関係もあつて、「茶芸」という名称がつけられた。また、「道」には深い意味があり厳肅莊重の感が強過ぎるといふ理由もある。これにより、「茶



うになるが、一九七〇年代にはいるとは国際的な孤立状態に陥るとともに人々は自国意識に目覚め、伝統文化を重視するようになった。「茶芸」業創業にふさわしい時代に入ったのである。その後の茶芸の普及は、各種文化の垣根を取り払い、社会各層の緊密な結合を促した。さらに茶芸の深化は文化を高め、人類社会に大きな影響を及ぼした。茶芸の発展に

ともない、茶文化はさらに深化拡大し、旧来の茶の風俗が復活するとともに、新規の茶芸形式も創造された。

茶文化の発展を検証すると、対立統一の道教思想、克己復礼の儒教思想、茶禪一味の仏教思想を融合し、すべて茶文化の中に体现されていることがわかる。茶文化はまさに東方文化の精華である。

理事會

第二回の理事会を五月三十一日の一〇時から池坊短期大学第二会議室で開催した。参加理事は二二名。会長挨拶の後、議事に入った。

総会に提案する議案について、平成一四年度事業報告、同決算報告、監査報告、平成一五年度予算案については、前理事会の決定に変更がないことを確認した。第一九回研究会は、サブズ問題を考慮し国内での開催を考慮するというところで提案することになった。役員のうち理事については、例会を行っている地域からの選出、煎茶研究者からの選出を考慮した案を提出することになった。また、会則については、会費を半額にする学生会員制の導入と、監事を監査と改める改正案を決定し

た。その他としては、公報発行予定の報告、会誌発行の現状が報告されたほか、会誌原稿審査規定、会誌編集委員会規定の一部を改めた。なお、懸案になっている会誌の寄贈先については引き続き検討することになった。

◎会誌原稿審査規定の改正

第三条第二項の「査読者に加えることができる」を「査読委員に替えることができる」と改める。

第三条第三項、第五条、第六条、第七条第二項、第八条第二項・第三項の「査読者」を「査読委員」に改める。

◎会誌編集委員会規定の改正

第四条を「編集委員は原則として査読委員を兼ねない」と改める。

総 会

本年度の総会を五月三十一日(土)一時から池坊短期大学こころホールで開催した。会長の挨拶の後小西茂毅、高橋忠彦両氏が議長に選出して議事にはいった。一四年度の事業報



◎会則の改正
第六条に学生会員を加える。第七条に「学生会員は毎年四千円を」を加える。
また「同一世帯に複数の普通会員がいる場合、申し出に基づき二人目からの会員については、会誌の配布を受けない普通会員となるという条件で、会費を四千円とすることが出来る」を加える。

講演會

西洋の茶文化―『茶の博物誌』を中心に

滝口明子

東洋から入ってきた茶が、ヨーロッパでは栽培できないにもかかわらず消費量を増やしてきたが、どのような茶文化を生み出してきたのかを考えてきた。

一七世紀にヨーロッパに入った茶は、次第に広がりオランダ・フランスで医学的な論争をまき起こすまでになったが、一八世紀にはいるとイギリスでも大いに普及し一八〇〇年頃には国民的な飲料・国民生活の必需品となりアフタヌーンティーなどの文化的伝統を作

り上げるまでになった。そしてこの一九世紀の子供の絵本にまで茶会が描かれるようになる。その少し前に出版されたのが、J.C.レットサムが書いた『茶の博物誌』である。『茶の博物誌』は「茶樹の自然誌」と「茶の医学誌」からなり、茶の栽培法や茶の種類、茶の人体への影響、効用などについて記したものである。レットサムはこの書において、茶の医学上の論争に一応の結論を出し、近代市民社会誕生という変化の時期における社交の上に茶を位置づけた。

CHERRYアは、陽気にさせる、元気づけるという意味で、一八世紀のイギリスの会話でも重要視されているが、茶(チャ)は人を陽気にさせるが酒のように酔わせることではない飲み物としてかなり早い時期から評価されていた。

(多くのスライドを使って飲茶状況や茶道具、ティーガーデンに関する解説が行われた)

蒔絵が語るもの

井尻益郎

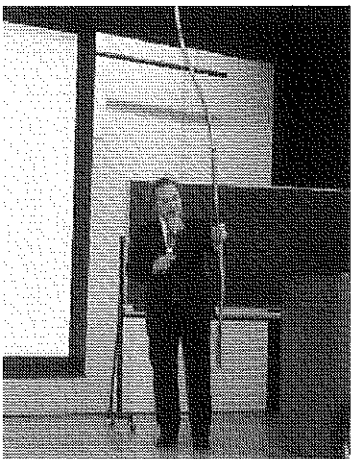
動物行動学の日高敏隆先生のお話によると、動物の中で人間は変な動物で、この環境に育てられながらこの環境を破壊するこういう生

物はないということである。まず人間は変な動物であることを認識しておかなければならないとおっしゃっている。その人間の中で、世界の人から見ると日本人は変な人種であるとされる。すると日本人は変な人種である人種でひようとするとポジティブな物を持っているのではないかと思う。人類は文明の発展により自然を破壊してきたが、日本人は少し前までは自然を守ってきた点から見てもやはり変わっている。

弓を見てもその変であることがわかる。弓を握るゆづかの位置も変なところに付いている。ゆづかは世界的に見て真ん中にあるのが普通である。弓は下手な人が引くと変なところへ飛ぶ。普通の弓も持っているにもかかわらず変な弓を使うし、その扱いも変である。日本人の見方には奥深い物がある。見える物で見えない物をあらわすなどということもある。茶の湯も普通ではない。茶の湯は「行ずる」ことで身体的哲学の問題になっている。

蒔絵に話を移すと、漆器は保存の仕方によっては太古のものさえ残るすばらしい物である。漆器は英語でジャパンと呼ばれるが、これは蒔絵があったからであらう。ヨーロッパの王侯にも好まれたものであるが、この蒔絵の

技法は中国にもなく日本にしかないが、まったく不思議なことである。蒔絵のすこさは、金属を粉にして蒔くという発想にある。金属は固形物だから必ず端がある。しかし日本人だけが金属を粉にすることで端をなくした。端がないことですよと繋がっていく。端があれば異端が出来るが、粉にすることであるかないかの二項対立「でしかない構造」をこえた。ここに蒔絵の深さがある。二一世紀人々が困難な問題をどのように解決していくか、



今二項対立ではない日本人の発想が役立つのではないか。金属個体の壁を越える、日本人のすばらしい知恵を確認しておきたい。(弓を使った説明、スライドを使った蒔絵の解説あり)

平成一五年度行事日程

総会(池坊短期大学)

五月三十一日(土) 一三時三〇分

大会(池坊短期大学)

六月一日(日) 一〇時三〇分

研究会

一九回 日時内容未定

二〇回 平成一六年三月六日(土)

お茶の郷博物館(静岡県)

テーマ「お茶の水色に

ついて」

例会

東海(名古屋女子文化短期大学)

四月二十五日(金) 午後六時〜

山中直樹氏「茶の

化学成分とその薬効」

堀内國彦氏「京の名水―茶

の湯の水ということ」

六月二〇日(金)

筒井絃一氏

高取友仙屈氏

九月二六日(金)

高橋忠彦氏「明清における喫

茶文化の展開

坪内淳仁氏「近世後期村方

における茶の湯」

一二月頃にもう一回開催予定

東京(東京芸術大学 二時〜)

五月二四日(土)

中村修也氏「林間茶の湯について」

六月二八日(土)

小林優子氏「煎茶と印材鑑賞」

木塚久仁子氏「土屋相模守政直

の横顔」

七月二六日(土)

矢野 環氏「利休百回記」の

文献学的研究の射程」

一〇月二五日(土)

佐藤留実氏「望月間道の名称に

ついて」

一二月二二日(土)

吉岡明美氏「茶会記に見る名物裂」

二月二八日(土)

名児耶明氏「古筆切断と茶掛け」

高知

七月二〇日(日)

碁石茶現地見学(碁石茶博物館)

八月三十一日(日) (J.R土佐荘

午前一〇時〜

小松聡氏「森田久衛門日記(三)」

一二月一四日(日) (J.R土佐荘

午後四時〜)

柏井武氏「茶事と茶会」

近畿(池坊短期大学 午後二時〜)

七月二六日(土)

桐浴邦夫氏「『移築』からみた

近代の茶室」

松本康隆氏「近代の数寄屋師に

ついて」

一二月 八日(土)

金巴望氏・稲垣正宏氏・

影山純夫氏「高麗茶

碗をめぐる」

一二月頃にもう一回開催予定

お知らせ

今年一〇月二四日(金)から二五日(土)まで、金谷町お茶の郷博物館で、「日本茶の起源を探る」と題した研究集会が開かれます。主催は茶学の会・お茶の郷博物館です。参加ご希望の方は、お茶の郷博物館シンポジウム

係までご連絡ください。

電話〇五四七―四六一五五八八

ファックス〇五四七―四六一五五七七

例会のご案内

高知例会

次の日程で開催します。会場はJ.R土佐荘です。なお一二月の例会については、発表の後簡単な茶事を行いますので参加を希望される方はあらかじめ学会事務局まで御連絡ください。

〇八月三十一日(日) 午前一〇時〜

森田久衛門日記(三) 小松 聡氏

〇一二月一四日(日) 午後四時〜

茶事と茶会 柏井 武氏

東海例会

第七回東海例会を次の通り開催します。ふるってご参加ください。会場はいつものように名古屋女子文化短期大学アセンブリ・ホールです。会員は会費は無料ですが、会員以外の方の参加には会費一〇〇〇円が必要です。〇九月二六日(金) 午後六時〜 明清における喫茶文化の展開 高橋忠彦氏

近世後期村方における茶の湯

―尾張国海西郡荷之上村

服部弥兵衛家にみる― 坪内淳仁氏

東京例会

次の日程で開催します。会場は東京芸術大学です。

〇一〇月二五日(土) 午後二時〜

望月間道の名称について 佐藤留実氏

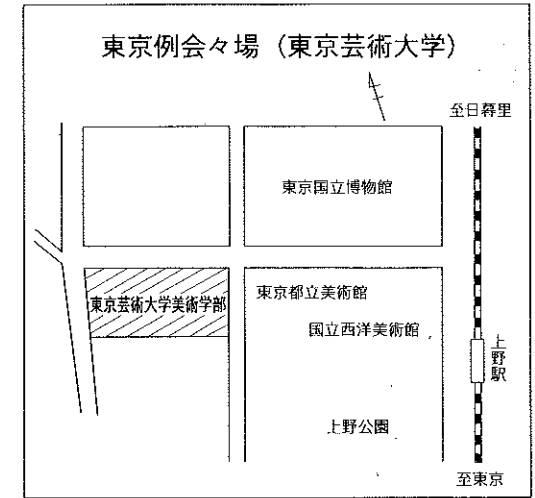
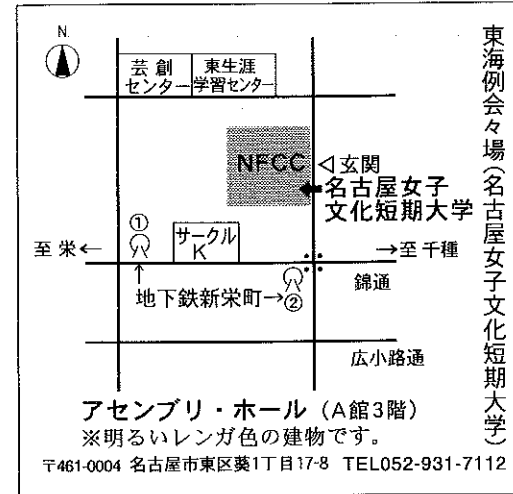
近畿例会

次の日程で開催します。会場は池坊短期大学です

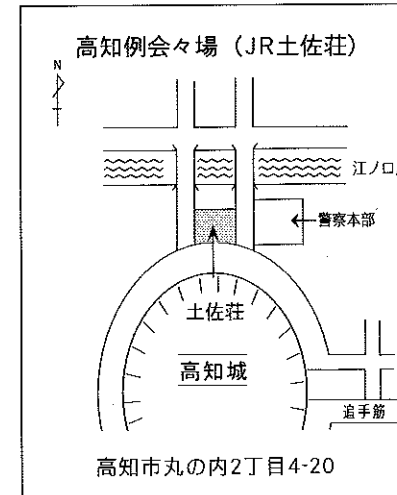
〇一二月八日(土) 午後二時〜

高麗茶碗をめぐる

金巴望氏・稲垣正宏氏・影山純夫氏



後記
 ＊総会・大会の会場にイヤリングの落とし物
 がありました。お心当たりの方は事務局ま
 でご連絡ください。
 ＊この号で大会の内容も掲載するつもりでし



たが、お知らせしなければならぬことが
 多かったため、次号にまわさざるを得ませ
 ん。お許しください。
 ＊会則や規定の改正については、改正部分し
 か載せていません。全文は会誌をご覧くだ
 さい。

役員および幹事氏名(五十音順)	倉澤行洋
会長	戸田勝久
副会長	小泊重洋
参与	中村昌生
理事	赤沼多佳
	影山純夫
	熊倉功夫
	竹内順一
	谷端昭夫
	中村利則
	橋本実
	堀内國彦
	ホルスト・ヘンネマン
監査	井尻益郎
幹事	飯島照仁
	原田茂弘
	山田哲也
	小川後楽
	神谷昇司
	高橋康夫
	谷晃
	徳川義宣
	名児耶明
	堀信夫
	美濃部仁
	久田宗也
	池田俊彦
	岩崎正弥
	船阪富美子